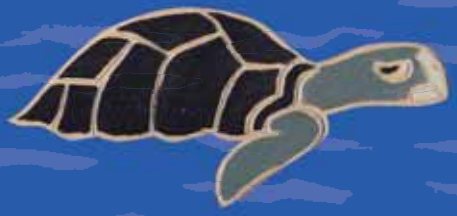
国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成23年8月1日発行　第35巻第8号通巻第407号

月刊みんぱく

2011 8月号

特集　恵みの海、悩みの海

海のサマ人　床呂 郁哉 ／ シンドバッドの末裔　飯田 卓
島と間違えられた魚の不思議　杉田 英明 ／ 豊穣の海と交流の道　佐々木 史郎
海洋資源のやりくり　須藤 健一 ／ 遠ざかるクジラ　岸上 伸啓
海洋統治と「島」　山田 吉彦



エッセイ 千字文

サラスポンダの謎

松井 今朝子

プロフィール
1953年、京都祇園に生まれる。南座にほど近い環境に育ち、幼少期より歌舞伎の魅力にとりつかれる。歌舞伎の企画、制作、演出等にかかわり、『吉原手引草』（幻冬舎）で直木賞受賞。おもな小説作品に『東洲しゃらくさし』（PHP研究所）『仲蔵狂乱』（講談社）、エッセイに『今朝子の晩ごはん』（ポプラ社）などがある。

語学がそれほど堪能でもないくせに、独りで海外旅行をしたがるから、これまでに数々の失敗談がある。もっとも単なる観光旅行の場合、往復便と宿泊先だけが決まった団体ツアーを利用すれば、そう心配は要らない。独り旅は勢い現地の方とコミュニケーションが増えて、何かと勉強にもなるのだった。

バリ島を訪れたのは七年前で、イスラム過激派による爆弾テロが起きた当時だから、欧米人向きのホテルが林立する地域の警備はたいそう厳しかったのを想いだす。

一番の目的は現地の伝統舞踊を観ることだったが、舞踊はたいがい夜から始まるので、昼間はタクシー観光をした。何しろ丸半日乗っても、日本だと小一時間も乗れないほどの料金で、つまりは円の威光に与る贅沢三昧だ。ロビン・ウイリアムズに似た優しそうなマレー人ドライバーは、私と言葉がよく通じないため、途中で知人の男性を通訳兼ガイドとして雇うことを要求した。何しろこちらは女性ひとりだし、見知らぬ土地で初対面の男性ふたりと同乗するのは勇気が要ったが、結果的には素晴らしくリーズナブルな料金で丸二日間のバリ観光を満喫できた。

通訳兼ガイドの男性はロビン君よりも肌の色が濃く、くりっとした眼で唇が大きくて分厚い、昔のマンガに出てくる南洋の人みたいだが、英語ばかりか日本語も流暢に話すインテリだった。バリ島はヒンズー教徒が多いはずなのに、ロビン君もマンガさんも熱心なイスラム教徒だから、9・11直後のアメリカの過激な反応にはかなり批判的で、日本がそれに追随することにも失望した旨をはっきり表明された。

日本語を話すマンガさんに、あなたが知っているインドネシア語は何かないかと訊かれて、とっさに浮かんだのは「サラスポンダ、レッセッセ」という中学の音楽の時間にインドネシア民謡として習った唱歌の一節だった。ところがふたりはそんな言葉もメロディーも全く心当たりがないという。

なぜだかとても気になって帰国後に調べたところ、それはなんと古いオランダ民謡の囃子コトバだと判明した。つまりは植民地時代の歌だから、ふたりは本当にご存じなかったのか、不愉快で無視されたのかはわからない。とかくアジア事情に疎くて無神経に振る舞ってしまう日本人のひとりとして、私は今もそのことを深く恥じざるを得ないのだった。

月刊 みんぱく
8月号目次

1 エッセイ 千字文
サラスポンダの謎 松井 今朝子

2 **特集 恵みの海、悩みの海**
3 海のサマ人 床呂 郁哉
4 シンドバッドの末裔 飯田 卓
5 コラム 島と間違えられた魚の不思議 杉田 英明
6 豊穣の海と交流の道 佐々木 史郎
7 海洋資源のやりくり 須藤 健一
8 遠ざかるクジラ 岸上 伸啓
9 海洋統治と「島」 山田 吉彦

10 研究フォーラム
国際シンポジウム
東南アジアにおけるゴングの映像民族誌
福岡 正太

12 みんぱく Information
14 地球ミュージアム紀行
ハリケーンを展示する
ルイジアナ州立博物館
林 勲男

16 散策と思索の径
愛と憎しみのベトナム池
木名瀬 高嗣

18 多文化をささえる人びと
コミュニティーが支える子どもたちの将来
ラテン系移民の子どもたちの学習支援
塚原 信行

20 歳時世相篇
国際先住民の日
南 真木人

22 フィールドで考える
次に何を植えたらよいか
中井 信介

24 次号予告・編集後記

家船の上でウニを調理中のサマ人の親子（撮影：床呂郁哉）

特集

恵みの海、悩みの海

海は多様な資源を人に提供し、人・モノ・情報の行き交う交通路でもある。
また、畏れや憧れの対象となり、ロマンや冒険、活劇、
ときには無頼や無法の物語を紡ぎだし、さらには戦争の舞台でもあった。
このように、人と海のかかわりは多様で話題は尽きないが、
今号では、住まい、生業、交易、資源管理、領海管理について考えてみたい。

「レパ」とよばれるサマ人の家船

採取した黒蝶貝（くろちょうがい）真珠を見せるサマ人の子どもたち

フィリピン南部スールー諸島の水上集落

海のサマ人——漂泊と定住のはざまに

床呂郁哉　東京外国語大学准教授

東南アジアの海域世界は、珊瑚礁やマングローブによって特徴づけられる、豊かな生態環境で知られる場所である。筆者のフィールドであるフィリピン南部のスールー諸島からマレーシアのボルネオ島にかけての地域でも、こうした特有の生態環境に適応した人びとの生活が伝統的に営まれてきた。スールー諸島の各種の海の民のなかでも、生活様式自体がもっとも移動に結びついているといえるのが、ここで詳しく検討するサマ・ディラウト（ないしバジャウ・ラウト。本稿ではサマ人と記す）である。

「漂海民」とよばれて

このサマ人は、東南アジア島嶼部の広大な地域に分布している。北は、フィリピンのミンダナオ南西部のサンボアンガ半島からスールー諸島を中心にダバオやセブ、パラワン島周辺に居住し、さらに国境を隔てたマレーシアのサバ州沿岸各地にも広く居住している。インドネシアでは、東カリマンタンからスラウェシ各地、そしてフローレス島、ティモール島、マルク（モルッカ）諸島などインドネシア東部の島々に至る領域に分散して居住している。彼らは、かつては陸地に家をもたずに、家族とともに家船で寝泊まりし、漁や海産物採集を営みながら、漁場から漁場へと漂泊生活をしていた集団であった。そのため、サマ人はしばしば「漂海民」ないし「海のジプシー」、などとして紹介されることがある。

典型的な漂海民は、家船で生まれ、小さいころから海を遊び場とし、親の漁を手伝いながら育ち、やがて一人前になると、結婚して自らの家船で暮らしはじめる。そして、年老いて死ぬまで、一生の大部分を海で過ごすような人生を送る。

漂泊か定住か

ただし実際には、フィリピン側のスールー諸島においても、家をもたずに家船だけで暮らす者は、人口的には非常に少なくなっており、多くのサマ人は遠浅の岸辺に建てた杭上家屋からなる水上集落などで暮らしている。

現在は陸住まいをしているサマ人の老人らのなかには、かつて子ども時代に経験していた家船での暮らしを懐かしそうに、おそらく幾分か理想化して語る人もいる。その一方で、家船暮らしを嫌う者もいないではない。いわく「陸住まいに慣れた今のわれわれだったら、家船での暮らしには耐えられない。食べ物といえば単に魚を煮ただけ。雨が降れば濡れるし、波があれば揺れる。われわれは、家船には住みたくないよ」と。

こうしてサマ人のなかには、従来の「漂海民」時代の社会的、文化的な特徴を徐々に喪失して陸地定住化の傾向を加速させている集団もあれば、一定の定住化傾向を示しながらも、また同時に海への根強い志向性や家船生活時代の高い移動性を、何らかのかたちで維持しつづけている集団も存在する。このように東南アジアの海に生きるサマ人は、今も漂泊と定住のはざまを生きているといえるだろう。

シンドバッドの末裔——北部モザンビークの沿岸航海

飯田卓　民博 文化資源研究センター

生活の足となっている帆船（イブ島、2005年）

町や島を結ぶ船の港（キサンガ、2007年）

インド洋を旅する

人類の長い歴史のなかで、海はながらく、富をもたらす窓口だった。文物や人びとも海をつうじて往来し、国全体を刺激してきた。そうした例は世界じゅうに多いが、とりわけインド洋沿岸のイスラーム諸社会は、海をつうじた交易や交流に熱心だった。

このことは、船乗りシンドバッドの冒険談からもわかる。この話の主人公は、異国での冒険をかいくぐって、富を手にすることになっている。この話を語りつぎ、文学として成立させたインド洋北岸の社会もまた、異国との交易が盛んだったのである。その交易ネットワークの広がりは、一四世紀の旅行家イブン・バットゥータの足どりからうかがい知れよう。アフリカ・アジア・ヨーロッパの三大陸にまたがる彼の旅行は、イスラーム海商のネットワークを利用したものだった。

「不審な」人

当時のような帆船での長距離旅行は、現在ではもはや一般的でない。旅行は飛行機で、輸送は動力船でというのがふつうである。しかし、わたしが調査した北部モザンビークの島嶼部では、インド洋を横断したのと同系統の船が沿岸部で今も活躍している。

キリンバ島におもむいたのは、僻地漁業のようすを調べることが目的だった。地方都市から陸路と海路で一日がかりのこの島は、調査開始時には僻地と見えたのである。しかしやがて、この島はむしろ、富裕な商人の町だということがわかってきた。だが彼ら商人は、居ながらにして船や荷を動かしているので、何を職業としているのかすぐにはわからない。わたしが世話になった大家もまた、そうした「不審な」人のひとりだった。

才士たちの島暮らし

農業をしていると大家はいったが、彼は妻を二人もめとっている。農業だけでそれだけの経済力がつくとは思えない。しばらくしてから、彼の収穫した果物や育てたウシなどが、島から本土へ出荷されていることがわかった。彼は、船荷を船員に売り渡すのでなく、取り引き相手を複数の町にもち、直接商談していた。つまり、彼自身が荷主であり、船荷を送る先やタイミングを采配していたのである。

彼のもとにはまた、隣国タンザニアから来た漁師が滞在していた。近くの海で彼らが捕った魚の収益は、居場所を与えたわたしの大家にも流れていたのである。この島では、ほかにも、文化的背景が似たタンザニア人（スワヒリ人）商人が活躍していた。そのなかには、島の沿岸で捕れたタカラガイを買いつけて出荷する者もいた。

島には生活物資が豊富でなく、貧者が住むには適さない。国を越えたコネクションを利用して、商才を生かしつつ身を立てる人こそ、島の暮らしにふさわしい。彼らの舞台はちっぽけだが、その暮らしは、インド洋を股にかけた冒険商人からうけ継がれているのだと思う。

ラテン語版『動物誌』写本挿絵，1235年

［コラム］

島と間違えられた魚の不思議

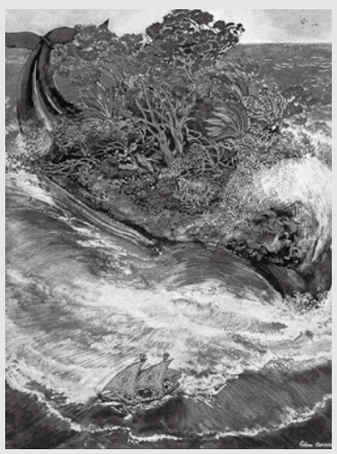
杉田　英明　東京大学大学院教授

『アラビアン・ナイト』のシンドバードの航海譚で、一行が最初に上陸した島は、巨大な魚の背中であった。焚かれた火の熱さに耐えかねて魚が海に潜ったため、主人公は溺れかけながらもその正体を見届ける。この驚異譚は、一八世紀初めにヨーロッパ語に訳されて、シンドバードの名前とともに一躍有名になったが、じつはそれ以前から東西世界に広く流布した説話でもあった。

二～四世紀に起源をもつギリシア語・ラテン語の動物誌では、この怪物は「アスピドケロネ」、つまり楯状の甲羅をもった亀と呼ばれ、人間を地獄へ誘い込む悪魔の化身と見做された。六世紀アイルランドの聖者ブレンダヌスを主人公とする『航海記』になると、島と間違えられる巨魚は「ヤスコニウス」の名前で、聖者らを目的地へ導く神の使いとしてあらわれる。一方、東方世界では、早くも三世紀の漢訳仏典「佛説鼈喩経」に、火で背中を焼かれて海中に潜る巨大な海亀が登場し、人間の煩悩と輪廻の比喩と解釈されている。同一の説話が各地で語られたのは、それがいかにもありそうな海の驚異を反映していると同時に、教訓譚・寓意譚としても役立ったからであろう。

徳川時代の蘭学者・森島中良は『紅毛雑話』のなかで、兄の桂川甫周がオランダ商館の書記スピンドレルから聞いた「北海の大魚」の話を書き留めている。それによると、彼が北海を漂流中、一島に上陸して料理をしたのち、二、三〇里も走ったころ、突然大渦巻がやってきたので驚いて振り返ると、「彼嶋きり〳〵と廻りて、水中へ沉たる」のが目に入った。あのときはまことに「危き目見たり」と語ったというのである。ヨーロッパ中に伝播した説話を、このオランダ人は自分自身の体験談として語っているのが面白い。けだし海の驚異譚とは、海に出た経験のある人、ない人をともに驚かせ、楽しませ、言語や時空の制約を超えて伝承されてゆく法螺話・自慢話の類なのであろう。

『千一夜』フランス語訳への挿絵


マルドリュス訳『千夜一夜の書』
レオン・カレ（1878-1942年）による
「シンドバードの第一航海」への挿絵

豊穣の海と交流の道――アイヌの船と航海

佐々木史郎　民博 民族文化研究部

豊かさだけではない

北の海といえば、海の幸というイメージが強い。北海道の海産物といえば、カニ類、タラ、ホッケ、ニシン、サケ、マス、ホタテ、そして昆布などを思い浮かべる人が多いだろう。確かに、栄養分豊富な千島海流に洗われる太平洋沿岸でも、冬に流氷で覆われるオホーツク海沿岸でも、対馬海流が届く日本海沿岸でも、北海道はどこにいっても海産物が豊かである。しかし、北海道の海はその豊穣な生産力のみで人びとをひきつけていたわけではない。そこはまた人と人、村と村、地域と地域を結びつける交流の道としても人びとをひきつけてきた。

交流の道

まず、日本列島の南と北を結ぶ道として日本海沿岸によりそう海の道がある。この道はおそらく縄文時代にまでさかのぼることが可能で、太平洋航路が主要幹線となる明治時代まで、日本の海上輸送の動脈だった。日本製の土器、陶磁器類のほか、中国製や朝鮮半島製の白磁や青磁、あるいは銭などがこのルートで東北や北海道に運ばれ、帰りの船には昆布やサケ、アワビ、ナマコなどの海産物、クロテンやシカの毛皮、さらに北方の珍品が乗せられていた。この日本海の道は北海道を経由して、樺太（サハリン）から大陸にまでつながっており、江戸時代にはこのルートで中国製の絹織物（蝦夷錦）が盛んに日本に輸入された。

一方、太平洋岸の道は、外洋に沿っているために海が荒れることが多く、難しいルートだった。ことに千島列島沿いは島と島のあいだを流れる海流が激しく、複雑な動きを見せるために、航路の設定が難しかった。しかしそれでも人びとは豊かな海産物と海の向こうの珍品を求めて海に乗り出していった。樺太に生まれたオホーツク文化は、北海道のオホーツク海沿岸から北千島までその足跡を残した。北海道で擦文文化がオホーツク文化を吸収する形でアイヌ文化が成立すると、その担い手たちも果敢に千島方面に乗り出し、カムチャツカ半島までその居住地を広げた。彼らは海産物とラッコの毛皮を日本にもたらし、鉄器やガラスビーズを北の世界に広めた。

イタオマチプ

アイヌの人びとは海にこぎ出すために、丸木船を底部にして、その上に木の板を樹皮のひもで何枚も綴り合わせた大型の船を作った。それは、「イタオマチプ」（板綴り船の意）とよばれる。櫂をこいで進むのが基本だが、ガマの茎や葉を編んで作った帆をかけて帆走することもできた。一九八九年にこのイタオマチプが復元され、民博に収蔵された。それは一九九三年に開催された特別展『アイヌモシリ――民族文様から見たアイヌの世界』のシンボル的な展示品となった。そして二〇一一年、特別展『千島・樺太・北海道　アイヌのくらし――ドイツコレクションを中心に』で再びその姿をみせることになる。

200年前のイタオマチプの姿（『蝦夷生計図説』より部分　東京大学総合研究博物館 所蔵）

海洋資源のやりくり

須藤健一　国立民族学博物館長

給油停泊中の漁船から釣り糸をおろしただけで数百万円の罰金とは。これは、ミクロネシアのある国が日本漁船の「違法操業」にくだした制裁である。外国漁船の排他的経済水域への入漁料に国家財政を依存するとはいえ、船員のささやかな楽しみにまで「国際法」を適用するとはまことにせこい話だ。

首長の才覚

オセアニアの多くのサンゴ礁島では島の周辺での漁労は自由。しかし、儀礼や祭宴で食料を大量消費したあと、首長が半年間の禁漁域をもうける。食料の枯渇時にも漁具や漁法を制限する。そのほか、特定の漁場（聖域）への入漁も禁忌。これらの禁を解く日、首長は男たちに共同漁を命じ、漁獲のすべてを島民に分配する。漁業資源の総量を読み、それをうまくやりくりするのが首長の才覚と責任である。

広い礁湖をもつ環礁島では、水路周辺の好漁場は首長一族の占有、そのほかの海面は共有にする。首長の漁場は多くの漁獲が必要なときに開放。一方、石をV字形に並べて潮の干満を利用して魚をとる石干見の場所は親族集団に割りあてられる。さらに、簗や筌を仕掛ける海底まで家族単位に細分する島もある。そして、自らの漁場への侵犯者には漁獲物や漁具の没収などをしきたりとする。

前述の日本漁船の悲劇は、海面所有が親族集団に分有されている島でおきた。海のただなかの島とはいえ、海の資源を利用する慣行は緻密でじつに多様だ。

古来の知恵

トンガ王国は王が海の所有者。国民はいつ、どこでも自由に魚がとれる。ところが一九七〇年代から首都への人口集中が、サンゴ礁海域での乱獲をまねいた。今では国王はじめトンガ人が大好きなボラを輸入している。魚価は高く、輸入マトン肉が食卓の主流となっている。

日本はこの国の漁業を三〇年前から援助してきた。礁湖の魚類枯渇の対策は、小型漁船による沖合底釣り漁の推進である。しかし、農民あがりの漁師の漁業経営は失敗。次が「養殖」支援である。ボラとシャコガイなどの養殖には莫大な経費がかかり、トンガ自前では維持できない。日本での漁業方式をオセアニアの島国に導入してもうまくいくとは限らない。

ハワイではカメハメハ王朝時代から養殖池を造成し、ボラやサバヒーなどを蓄養してきた。オセアニアの多くの島には、養殖池をつくらなくても、「聖域」をもうけ、漁法規制や海面を「禁漁区」にするなど、魚を育て蓄える伝統がある。近代的な「養殖技術」に頼らなくても、古来の海の資源にまつわる知識と手法は、今なお「資源のやりくり」を教えてくれるはずである。

日本人専門家の指導によるシャコガイの養殖事業（トンガ、1992年）

礁湖の追い込み猟（ミクロネシア連邦チューク州、1983年）

遠ざかるクジラ

岸上伸啓（きしがみ のぶひろ）　民博 先端人類科学研究部

地球上には約八五種類のクジラが生息している。そのなかで体長が四メートルに満たないものはイルカとよばれている。人類のイルカ漁の起源は数千年前にさかのぼり、四メートル以上の大型クジラ類の捕獲は一〇〇〇年以上の歴史をもつ。人類はこれまでクジラを海の幸のひとつとして食料や燃料、産業用資源に利用してきた。

先行するスローガン

ところが、欧米諸国が商業捕鯨から撤退した一九六〇年代ごろからクジラの保護を主張する国が増加し始め、一九七二年の国連人間環境会議では「クジラを救えずに環境は守れない」というスローガンのもとクジラの保護が主張された。そして一九八二年、国際捕鯨委員会（以下、ＩＷＣ）はシロナガスクジラなど一三種類の大型クジラの商業捕鯨の一時的停止を決定し、現在まで続いている。

現在、ＩＷＣが認可している捕鯨は、アラスカなどにおける先住民生存捕鯨、日本の調査捕鯨、商業捕鯨の一時的停止への異議申し立てに基づくノルウェーらの捕鯨のみである。しかし、ＩＷＣに加盟していないカナダなどの国々は大型クジラの捕獲をおこなっているし、イルカ漁は各国の管理に任されている。捕鯨をめぐる現在の問題は、クジラを適切に管理し、持続可能な捕鯨をめざすべきＩＷＣが機能不全に陥っていることである。このため、十分な生息数が確認されているミンククジラでさえ商業捕鯨再開のめどがたっていない。

イヌイットによるホッキョククジラ猟　（カナダ国ウンガヴァ湾、2009年）

苦境に立つ捕鯨

日本では調査捕鯨以外に、小型鯨類を対象とした沿岸捕鯨やイルカ漁が実施されているが、鯨肉の流通量が少ないうえに、価格が高いため、鯨料理は日常食とはいえなくなっている。また、捕鯨に反対する者や鯨肉を食べない若者が増加しつつある。さらに、捕鯨に必要な砲手や解体作業員らの特殊技能の継承も困難になっている。このように日本の捕鯨はさまざまな問題を抱えている。これに追い打ちをかけているのが、東日本大震災によって、イルカ漁や捕鯨が盛んであった鮎川などの三陸漁村が崩壊したことや、クジラを環境保護のシンボルに掲げる国際環境ＮＧＯの反捕鯨キャンペーンや妨害活動である。このままでは、日本の捕鯨は衰退の一途をたどると予測される。

海はこれまでと同じくわれわれに生活の糧を提供しつづけるだろう。その一方で、海の幸としてのクジラとわれわれの関係は急速に変容しつつある。現在、日本の捕鯨は苦境に立たされているが、さまざまな立場から捕鯨の将来を議論し、振興策を実施することが必要だと考える。

海洋統治と「島」

山田吉彦（やまだ よしひこ）　東海大学教授

管理し活用する

海を統治するということは、人類永遠の課題である。海洋統治というと「制海権」を連想するが、それは、軍事的に他国より優位に立つことだけではなく、海を管理し活用することである。海洋資源開発や漁業の技術革新が進み、海洋統治はますます重要なものとなっている。

中国は、二〇一一年の全国人民代表大会において海洋強国に向けた活動の推進を掲げ、海洋資源の確保、水産物の獲得を目指す方針を示し実力行使に動き出した。二〇一〇年九月に尖閣（せんかく）諸島周辺海域において中国漁船が海上保安庁の巡視船に衝突した事件は記憶に新しい。その他、中国の海洋観測船は頻繁に日本の排他的経済水域内において無許可で調査活動をおこなっている。同様にベトナム、フィリピン、インドネシアなどと隣接する海域においても紛争がある。二〇一一年五月には、ベトナム漁船に対し中国の警備艇が発砲する事件が起きた。

島を拠点に

海洋統治の概念は、日本の中世に活動した水軍にも見られる。瀬戸内海に基盤を置いた村上水軍である。海軍力を背景に海上交通を掌握し、一種の徴税とひきかえに海上での安全を保障していた。そして、海洋利権による領地運営をおこなっていたのだ。その拠点となったのが、来島（くるしま）や能島（のしま）などの島に築かれた「海城」だった。

人が生きてこそ

国連海洋法条約では、沿岸から一二海里までの領海と二〇〇海里までの排他的経済水域が認められている。その海域では、漁業管轄権や海底資源の開発権などの経済的な権益が獲得できるのである。この海域を広くするためには、離島を領土としてもつことが有効である。ただし、同条約の規定では、島を拠点として排他的経済水域を主張するためには、島に人が居住するか恒常的な経済活動をおこなうことが必要となる。人が生きてこそ島の意義があり、人類の財産である海を統治することが認められるのである。また、海洋における国境紛争を回避するためには、島における人びとの生活を安全にし、かつ充実させることが重要だ。

二〇一一年六月、シンガポールで開催されたアジア海上安全保障会議においては、中国の南シナ海進出が焦点となり、アジア諸国が連携した対抗措置が求められた。武力紛争への進展を避けるために国際的な枠組みにおいて海洋統治を考える必要が生じている。「海は人類共通の財産」という国連海洋法条約の理念のもと、国際協力体制を構築すべきだ。

沖の鳥島

村上水軍の拠点「能島」

研究フォーラム

国際シンポジウム

東南アジアにおけるゴングの映像民族誌

福岡 正太（ふくおか しょうた）
民博 文化資源研究センター

対象を記録し分析するばかりでなく、人と情報を結びつける映像。
映像を介した意見と情報の交換は、対象への理解をうながし、あらたな発見を見出す機会をもあたえてくれるだろう。
今回のシンポジウムでは、東南アジアのゴング文化を論じるとともに、映像記録の可能性について意見をかわした。

ゴング文化をとらえる視点

東南アジアのゴング音楽については、これまでさまざまな調査研究がおこなわれてきた。民博においても、二〇一〇年三月に新しくなった音楽展示において、東南アジアのゴングをテーマとしたセクションをもうけた。そこでは、フィリピンの平ゴングのアンサンブル、カンボジアのこぶつきゴングと平ゴングのアンサンブル、フィリピンのクリンタン（写真参照）、カンボジアの大規模なアンサンブル、ピン・ピアット、そしてインドネシアの大規模アンサンブル、ガムランを展示している。この展示の準備のために各地において映像記録の作成をおこない、それらの映像の一部も展示場で公開している。

わたしたちはこれらを踏まえて、さらに東南アジアのゴング文化への理解を深めるための映像の制作を目指している。今回のシンポジウムは、東南アジア音楽研究の専門家を集めて、今後のゴング文化の映像記録への視点を探ることを目的として開催した。あらたに作成しようとしている映像記録は、個々の地域のゴング文化の記録の空白を埋めながら、相互の関連を探り、さらに現代におけるゴング文化の展開を探ろうとするものである。

ゴング研究の広がり

かつてゴング音楽の研究は、インドネシアのガムランやタイのピーパートなど、おもに王権と結びついて発達してきた大規模なアンサンブルに集中する傾向があった。それに対して各地の少数民族のゴング・アンサンブルなども徐々に調査研究が進みつつある。シンポジウムでは、長年ベトナム音楽を研究してきたフォン・グエン氏により、ベトナム中部高原の少数民族にみられるさまざまなゴング合奏が、写真や録音、映像をもちいて紹介された。また柳沢英輔氏（青山学院大学）は同じくベトナム中部高原のジャライとよばれる人びとの儀礼におけるゴング演奏とゴング調律師の技を取り上げ、自身が制作した映像作品の上映もおこなった。

近年発展しつつある音楽考古学の分野で研究をつづけるアルセニオ・ニコラス氏は、難破船から発見されたゴングなどから、一〇世紀から一七世紀にかけて交易品として流通したゴングの変遷について論じた。こうした視点から見ると、東南アジアの各地のゴング文化は、常に地域間の交渉のなかで発展してきたことがわかる。

クリンタン（タラカ、フィリピン、2008年　撮影・寺田吉孝）

ゴング文化の現在

一方、ゴング文化は、現代においてもなおダイナミックに変化している。たとえば、ゴング製造について、ゴング工房が失われていく危惧が示される一方で、集約化と大規模化もみられる。バリのゴング職人の家系をひく研究者イ・マデ・カルタワン氏によれば、バリ島では、ガムランの楽器すべてを製造できる工房は減る一方で、地域の好みに合わせて小規模に楽器の製作や調律をおこなう職人は増えている。その背景には、ゴングを流通させる楽器商の出現がある。彼らは、ジャワ島の大規模な楽器工房から、より安価で質の良いゴングを買い取り、バリ島各地に流通させている。

王宮に伝わるゴングを磨く（チルボン、インドネシア、2009年ムハンマド生誕祭にて）

他方、ゴング音楽は、東南アジア以外の地域へも広がりつつある。民博の寺田吉孝氏はそうした例のひとつとして、フィリピン系アメリカ人のあいだでのクリンタン音楽の広がりを報告した。クリンタンは、フィリピンからの移民社会において共通の文化遺産としてみなされつつある。北米におけるこうした独自の展開は、おそらくフィリピンにおけるクリンタンにも逆に影響を与えるようになるだろう。

東南アジア地域内においても、多様なゴング文化に対する意識が高まりつつある。インドネシア芸術教育財団のエンド・スアンダ氏は、ゴングを題材のひとつとして取り上げた、芸術における多文化教育カリキュラムについて報告した。東南アジアは、多くの民族からなる社会であるが、芸術教育プログラムは、必ずしもそれを適切に反映していない。報告されたカリキュラムは、多文化を前提として、自らの文化伝統を再発見することを手伝う実践的教育プログラムとして興味深いものだった。

現代のゴング文化を映像でとらえる

梅田英春氏（沖縄県立芸術大学）は、これらの議論を踏まえ、伝統的な文脈を超えたところで、ゴング文化の現在を映像で記録することの重要性を論じた。伝統的なゴング演奏のみを撮影しても、現代のゴング文化のダイナミクスは記録できない。

このシンポジウムで提示された多様な視点を反映し、東南アジアのゴング文化の動態を記録する映像を制作することは容易ではない。一本の映像作品の提示だけで、それを実現することはできないだろう。多様な映像素材から東南アジアのゴング文化のダイナミクスが浮かび上がってくるような映像提供の方法を模索していく必要がある。

わたしたちはこれまでの研究で、多くの人が、ひとつの映像から、いかに異なるものを引き出すかを経験した。映像を触媒とした意見と情報の交換は、意外な発見の場となる。わたしたちは映像を触媒として、多くの人びとがゴングについての意見や情報を交換する場をつくり、そこでえた知見を蓄積していく試みも同時に進めていきたいと考えている。

このシンポジウムは、人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究における「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」班の研究活動の一環として、二〇一一年三月一四日と一五日の二日間、国立民族学博物館第四セミナー室にて開催した。

みんぱく
Information

どっぷりオセアニア――夏のみんぱくフォーラム2011

面積のほとんどを海が占めるオセアニアの人々は西洋世界などと出会うはるか前から、高度な航海技術をはじめとした独自の文化を育みながら生活してきました。その一端を、多彩なプログラムを通じて紹介します。

開催期間　8月21日（日）まで

◆研究公演

「マオリの伝統芸能カパハカ」

ニュージーランドで何世代にもわたって伝えられてきたマオリの芸能「カパハカ」を、マオリのグループ、ナ・ハオ・エ・ファが演じます。

①**公演**

※参加申込は締め切りました。

②**ワークショップ**

「テ・アラ・マオリ――マオリの道」

ナ・ハオ・エ・ファによるパフォーマンスとワークショップ。マオリ語のあいさつやフレーズ、カパハカの基本的な型や動きを覚えます。

日時　8月7日（日）10時30分～11時30分
　　13時30分～14時30分

場所　玄関前広場、
　　雨天時本館1階エントランスホール

※参加無料、申込不要

◆みんぱく映画会／みんぱくワールドシネマ

「サムソンとデリラ」

日時　8月21日（日）13時30分～16時30分
　　（開場13時）

場所　講堂（先着450名）

※参加無料、申込不要

※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

◆展示場クイズ

「みんぱくQ　オセアニア編」

期間　8月1日（月）～8月21日（日）

場所　オセアニア展示場

※要観覧料、申込不要

◆みんぱくゼミナール

左のページをご覧ください。

◆みんぱくウィークエンド・サロン

フォーラムの期間中は、特別シリーズとしてオセアニアにまつわるお話をお届けします。詳細は本誌24ページをご覧ください。

以上、夏のみんぱくフォーラム関連イベントのお問い合わせ
広報企画室　企画連携係
電話　06-6878-8210

博学連携教員研修ワークショップ2011 in みんぱく

「学校と博物館でつくる国際理解教育――新しいみんぱく展示を活用する」

みんぱくを活用した国際理解教育の実践事例の紹介やワークショップを通して、学校教員を中心に、博学連携の意義や可能性について考えます。

実施日　8月5日（金）
時間　10時20分～17時（受付10時より）
会場　セミナー室及び本館展示場内

【第1部】講演とミュージアムツアー

【第2部】ワークショップ

①民博のデジタル・コンテンツを利用した授業づくり
②仮面をつくって語って異文化理解
③歌と踊りで語りつぐ南の島の物語
④自分の希望を叶えるエケコ人形
⑤ことばで「世界」をみてみよう
⑥「見方」を開発――インドの染織資料が見えてくる！

※参加無料、要申込（定員に余裕があるワークショップは、当日参加も可能です。）
ワークショップ詳細及び申し込み方法についてはホームページをご覧ください。

みんぱく夏休みこどもワークショップ

「撮って、切って、貼って、作ろう！自分発のメディア世界！」

テーマに沿って、展示場で写真をとって、それらを加工し、コラージュしながら世界の人びとの生活について学びます。

日時　8月8日（月）10時30分～16時
　　（受付10時より）

会場　本館展示場及び本館展示場内ナビひろば

材料費　実費500円

持ち物　デジタルカメラ

対象　小学生以上
　　（小学生未満は保護者同伴で参加可）

※定員12名になり次第締め切ります。
申し込み方法についてはホームページをご覧ください。

みんぱく秋の遠足・校外学習　事前見学&ガイダンス

秋の遠足・校外学習にむけて事前見学に来館される学校団体の先生方を対象としたガイダンスを開催します。生まれ変わったオセアニア・アメリカ展示についても研究者が展示場で説明します。

実施日　8月30日（火）
　　9月1日（木）
　　9月2日（金）

時間　14時～17時

場所　第5セミナー室ほか

申込方法

みんぱくホームページから参加申込書をダウンロードし、必要事項を記入の上、FAXにてお送りください。

お問い合わせ
広報企画室　広報係
電話　06-6878-8560

東日本大震災被災地に対する本館の取り組みについてはホームページをご覧ください。

毎日新聞夕刊連載「旅・いろいろ地球人」

みんぱくの研究者のエッセイが毎週木曜日に掲載されています。

＊お問い合わせの受付時間は平日9時から17時（土・日・祝を除く）です。

刊行物紹介

■梅棹忠夫 監修、比較文明学会関西支部編、中牧弘允 責任編集

『地球時代の文明学2』

京都通信社　定価：2,500円

現代への文明学的視角として、国際通貨供給システムとジャワの原子力発電所についての論考が注目される。前者はアメリカ・ドルの暴落を予測し、後者はイスラムの指導者が表明する原発への憂慮を明らかにしている。

■竹沢尚一郎 編著

『移民のヨーロッパ――国際比較の視点から』

明石書店　定価：3,990円

世界では総人口の3%、2億2千万人が国外で暮らしている。移民現象を理解することは、現代世界を理解するための一歩といえる。ヨーロッパの移民問題を論じた八論文に、東アジアに関する二論文からなる本論文集は、移民問題への格好の入口である。

みんぱくゼミナール

会場　国立民族学博物館 講堂
時間　13時30分～15時（13時開場）
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は、観覧料が必要です。）

第399回　8月20日（土）

【どっぷりオセアニア――夏のみんぱくフォーラム2011関連】

海に生きるくらし――島と島をつなぐ遠洋航海

講師　小林繁樹（国立民族学博物館　教授）

オセアニアでは、多くの人びとが海とともにくらしています。海は、魚や貝などを手に入れる日常的な生活の場であると同時に、遠くはなれた島と島をつなぐ道でもあります。それは、人と人を結びつける紐帯となります。こうした海に生きるくらしは、グローバル化が進む私たちのライフスタイルにもヒントとなることでしょう。

第400回　9月17日（土）

【第400回記念ゼミナール】

グローバリゼーションと移民

講師　**伊豫谷登士翁**（一橋大学　特任教授）
　　須藤健一（国立民族学博物館長）

戦後の移民は2億人といわれます。異文化のなかで心地よい居場所をさがし、新たな人間関係をきずいて生活する移民の前途は多難です。人は何を求め、どんな希望を胸に国境を越えるのか。移動があたりまえの今日、移民について考えてみましょう。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話06-6877-8893（平日9時～17時）　FAX06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）

会場　国立民族学博物館　第5セミナー室
定員　96名（当日先着順、会員証提示）

第399回　9月3日（土）14時～15時

【みんぱくコレクションをかたる】

蚊帳に見えない蚊帳のはなし

講師　**白川千尋**（国立民族学博物館　准教授）

ラオスの蚊帳は「虫除け」というだけではなく、さまざまな機能があり、女性の嫁入り道具にもなっています。この蚊帳との出会いは異文化にふれる醍醐味を教えてくれるものとなりました。民博収蔵の美しい蚊帳をじっさいにお見せしながらお話しします。

第400回　10月8日（土）14時～15時

※開催日にご注意ください

【特別展「千島・樺太・北海道　アイヌのくらし」関連】

日本の人類学の黎明とアイヌ文化

講師　**佐々木史郎**（国立民族学博物館　教授）

日本の人類学・民族学は今から120年ほど前に産声をあげましたが、当時の研究者はどのようなことを考え、どのような記録を残したのでしょうか。それを知る手がかりともなるのがアイヌ文化研究です。当時収集された資料をご覧いただきながらお話します。

※講演会終了後、特別展見学会があります。

東京講演会

第99回　9月24日（土）14時～15時

【特別展「千島・樺太・北海道　アイヌのくらし」関連】

アイヌ文化への憧憬

講師　**佐々木史郎**（国立民族学博物館　教授）

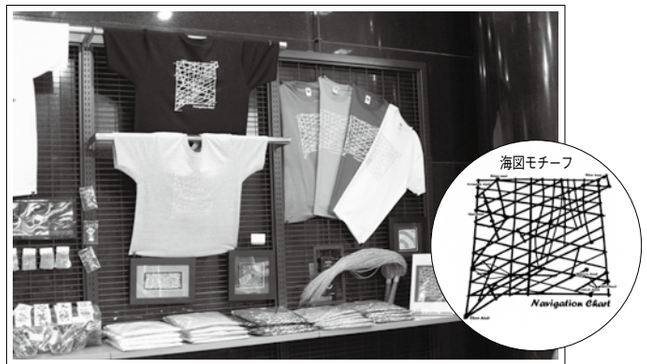
19～20世紀にかけてドイツと日本の人類学者はアイヌ文化に強い関心を示し、積極的に資料を収集しました。人間の理想郷を求めるドイツとコロボックル論争に見られるように自らのルーツをさぐる日本。それぞれの思惑は収集資料からもうかがえます。時代背景もよみときながらお話します。

会場　江戸東京博物館 学習室

定員　70名（要申込）

海図オリジナルTシャツ

オセアニア展示のリニューアルにあわせて、海図（スティック・チャート）Tシャツの色、サイズが増えました。デザインは、マーシャル諸島の航海訓練で用いられた、ヤシの葉柄と貝殻でつくられた「海図」がモチーフです。もとの海図はココヤシの葉柄と貝殻を用いてつくられており、それぞれ海のうねりの方向と島々の位置を示しています。



全6色 <ブラック・杢グレー・バイオレット・ケリーグリーン・ベビーピンク・オーシャンブルー>
各S・M・Lサイズ　※XLとキッズサイズはブラックのみ
定価 2,100円（税込）

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

電話　06-6876-3112
FAX　06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

ハリケーンを展示する
ルイジアナ州立博物館

林 勲男（はやし いさお） 民博 民族社会研究部

自然の影響のみならず、人間の作り出した社会や文化のありように目を向けずには、今や災害をかたることができない時代となった。記憶を正確に次世代へと伝える役割をになう博物館に、今できることは何なのか。災害の背景にある人の自然へのかかわり方、影響するさまざまな事象を多角的な視点で紹介する博物館をとりあげる。

「物語」として語り継ぐ

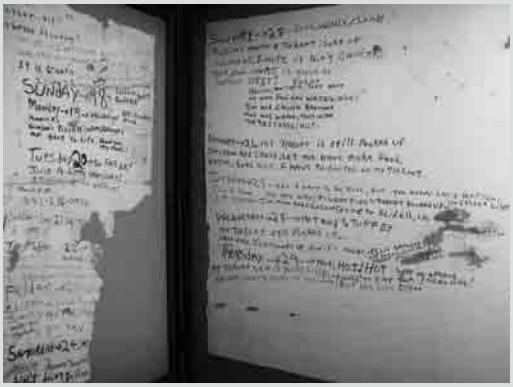
自然災害の大きさや様相を決めるのは、自然現象の力だけではなく、歴史のなかで作り上げられてきた社会のあり方や人びとの暮らし方による部分が大きい。それを身近におきた災害で、わかりやすく展示しているのが、ルイジアナ州立博物館（以下、ルイジアナ博物館）の「ハリケーンと共に生きる――カトリーナ、そしてこれから」である。二〇一〇年一〇月末に常設展示の一部としてあらたに加わったものである。

過去の災害を正確に後世に伝えることは当然のこととして、それをどのような手法を用いて、いかなる「物語」として語り継ぐかが難しい。博物館展示でその実践例を示したのが、「ハリケーンと共に生きる」展である。二〇一〇年三月、神戸で開催された「世界災害語り継ぎフォーラム」で、同博物館に勤務する歴史学者、カレン・リーゼムさんから、まだ準備中の展示の話を聞いて以来、ニューオリンズを訪れる際のあらたな楽しみとなっていたのが、今年の三月初旬に実現した。奇しくも東日本大震災発生の数日前のことであった。

当事者の声も展示する

まず博物館前には、約四〇〇人を救出したボートが置かれ、モニターで流される災害時の映像とともに道行く人びとの足を止めさせる。エントランスホールに入ると、そこにはロック歌手〝ファッツ〟ドミノの被災したピアノが置かれている。ニューオリンズといえばジャズをはじめとした音楽の街。このピアノは、まさにニューオリンズの被災を象徴している。

湿地帯に立地した都市とハリケーンや洪水災害の歴史から展示は始まり、カトリーナ襲来時のニュース映像を上映するシアターへと続く。「これってアメリカ？」の部屋は被災者や救援者、報道者たちによる自らの体験の語りや、救援物資や逃げ遅れた人びとをヘリコプターで釣り上げて救出したときのバスケットなどと共に、避難手段がないまま取り残された一



救助を待つあいだに綴られた「壁日記」

人命救助に使用されたボート

ロック歌手'ファッツ'ドミノの被災したピアノ

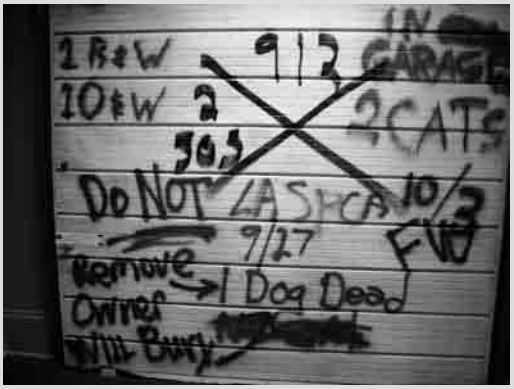
救出されたテディ・ベア（所有者からの寄贈）

人の男性がアパートの壁に綴り続けた「壁日記」も実物が展示されている。被災遺物を展示するにとどまらず、災害対応にあたったさまざまな立場の人びとを取り上げ、彼らの活動や肉声、メッセージを紹介することで、災害の多様性、複雑性を示している。ルイジアナ博物館は、この展示のための遺物や情報の収集を、メディアを通じて広く呼びかけながら、災害発生後ひと月も経たないうちに開始したという。

自然の脅威と共生するために

次の展示コーナーでは、カトリーナの襲来が大災害となった背景について、環境・開発・地理・防災・対応などに注目しながら解説している。原因と結果の単純な図式を提示するのではなく、災害という出来事の背景をなすさまざまな事象の関係構造を明らかにしており、情報の豊かさという点に加えて、確たる分析の視座を示している。また、地球温暖化の影響で海水温度が上昇することによって熱帯低気圧が成長するメカニズムを示したうえで、カトリーナが巨大化していった過程や、堤防決壊によって都市が浸水していく様子をイラストで説明したり、襲来の事前と事後の政府による対応の失敗についても述べている。そして最後の展示室では、一人ひとりが災害による生活への影響について考え、それぞれができる防災・減災対策をとることの重要性を訴えかけている。

この展示のタイトルが示すように、ミシシッピー川河岸に発展した都市ニューオリンズが、過去約三〇〇年に渡って繰り返し経験した自然災害によるダメージや都市機能・住民生活の再建の歴史を紹介し、そしてこうした自然の脅威との共生のためには、未来を見据えて防災・減災や環境問題への対応に取り組むことの重要性を、入館者一人ひとりに訴えかける展示となっている。



捜索を終えた住宅の外壁に書かれた情報。建物内の生存者・死者数、レスキュー隊が捜索を終えた日時などが記されている。

右の情報の解説

多文化をささえる人びと

コミュニティーが支える子どもたちの将来——ラテン系移民の子どもたちの学習支援

国籍、言語、文化背景の異なるさまざまな人が生活する愛知県豊川市。
ここでは、異文化を生きる子どもたちが、日本社会のなかで十全な人格形成と教育上の発達を果たせるよう、
またルーツとなる文化を継承できるよう、親自らが主体となって支援するさまざまな教育プログラムがおこなわれている。

塚原 信行（つかはら のぶゆき）
京都大学准教授

学習支援活動の始まり

豊川稲荷で知られる愛知県豊川（とよかわ）市は、約一八万の人口に対して五六〇〇人程度の外国人が登録されており、これは市人口のおよそ三パーセントにあたる（ともに二〇一一年五月現在）。登録全体の約半数をブラジル籍が占め、これに韓国・朝鮮籍、中国籍、フィリピン籍、ペルー籍の人びとが続く。

近隣の豊田（とよた）市や豊橋（とよはし）市と同様、市内小中学校には相当数の外国人児童生徒が在籍しており、その多くは日本語と異なる言語を家庭言語とするだけでなく、異文化も背負いながら学校生活を送っている。複数の言語や文化にまたがった環境で成長する子どもたちには多面的な支援が必要であり、豊川市でも、センター校設置や外国人児童生徒担当教員および指導助手の配置がおこなわれてきた（現在はセンター校に替えて四つの拠点校が設けられ、八人の外国人児童生徒担当教員と一〇人の指導助手を中心とする指導体制が敷かれている）。しかし、この指導体制の主眼は、外国人児童生徒が日本の公教育のなかで支障なく過ごしていくことを可能とすることにあり、母語や母文化に対する配慮は必ずしも十分とはいえない。

こうした状況を変えていく必要性を感じたペルー人の親が中心になり、二〇〇一年に自分たちで立ち上げた活動が「ラテンアメリカサークル教育プログラム」（通称PECLA）である。現在は豊川市国際交流協会の登録ボランティアサークルとなっており、二〇〇三年ごろからはブラジル人の親も活動に参加するようになった。二〇一一年現在、プログラムにはおよそ三〇家族、四〇人ほどの子どもが参加している（「およそ」というのは、月単位で増減があるためである）。活動内容の中心は、ほぼ毎週開かれている三つの言語教室（スペイン語・ポルトガル語・日本語）である。土曜日の午後二時から五時まで、一時間のクラスが三コマ（合計九コマ）あり、スペイン語教室に一時間出席した後、日本語教室に二時間出席するなど、子どもは複数の言語教室に参加できるようになっている。加えて、ペルーやブラジルのダンス教室や母の日の行事、クリスマスパーティーといった、親世代の文化を子どもと共有するためのイベントもおこなわれている。

プログラムの特徴

PECLAプログラムの特徴は、当事者であるペルー人やブラジル人がすべてにおいて中心的役割を果たしていることである。日本人スタッフの役割は基本的に日本語教室の運営に留まる。経費面においても、公的機関からの助成のみに依存せず、不足分を会費という形の自己負担によってまかなっている。当事者が中心的役割を果たすこの体制は、自らの必要性に応じて活動を組み立てることができるメリットがある反面、周辺の協力者との行き違いが生じやすい。

例えば、国際交流協会の職員から「なぜボランティア団体なのに会費を徴収するのか」という質問が投げかけられたことがあった。公的助成の対象をボランティア組織に限ろうとする職員にとって「会費＝有償」というイメージもあったのだろう。当事者にしてみれば、必要な経費を参加者全員で平等に負担するために自分たちで決めたルールのひとつに過ぎず、そもそも質問の意図が理解できない。結局、話し合いの場を設けて、お互いの疑問を解消する必要があった。些細（ささい）な意識の違いが後に大きな食い違いを生み出すこともあり、周辺協力者との日常的コミュニケーションを密にすることは不可欠である。

親の意識の変化と当面の課題

リーマン・ショック以降、このプログラムに参加していた多くブラジル人が帰国した。残った者のなかには、ほぼ永住する覚悟を決めた者も多いようだ。それは、言語教室の成果に対する注文という形であらわれはじめている。以前は託児所感覚で子どもを通わせる親もいたが、最近では、通わせているにもかかわらず成果が出ていないという不満をあらわにするほど、子どもの言語能力の伸長を真剣に心配する親が増えている。永住する以上、子どもの将来のためには言語能力が資産となることを認識しはじめている様子がうかがえる。

現在プログラムが抱えている問題のひとつは、活動場所の確保である。言語教室は市の社会福祉会館を借りておこなっているが、同施設はさまざまな団体が利用するものであり、常に予定通りの活動場所を確保できるわけではない。別の公共施設を利用する場合もあるが、それでも必要に見合った会場を確保できないことがある。言語授業はプログラムの中心をなす活動であり、これがなくてはプログラム自体が消滅しかねない。しかし、授業である以上、教室として使える場所でなければならないことが確保を難しくしている。

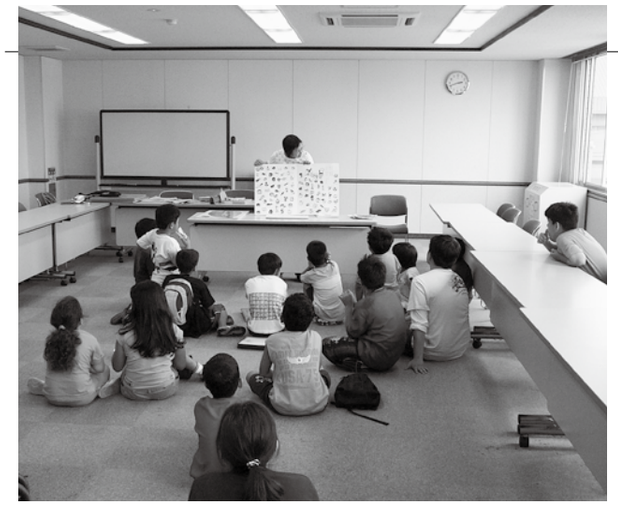
また、今年の夏は、電力不足対策として土日出勤を導入する企業があり、これがプログラムの継続を危うくしている。親が土日出勤をするようになると、子どもを活動場所まで送り迎えすることができないからである。

問題は山積しているが、「子どもたちの将来のために」という意識が共有され、当事者主体の運営体制が維持されているあいだは、なんらかの形で活動が継続されるのではないだろうか。リーマン・ショックを契機とする永住の意識化も、この文脈においては肯定的な影響をおよぼすように思われる。移民の自助活動が一〇年継続されてきたこと自体、どこにでもある普通のことというわけではない。この点に鑑（かんが）みれば、多少は楽観的な見通しを立てても許されるような気もしてくるのである。

日本語スピーチコンテストに出場したプログラム参加の子ども

サンポーニャを演奏する子どもたち

カード教材を使った授業風景


物語の読み聞かせ（日本語）

CALENDAR
八月
第41回

歳時世相篇

国際先住民の日

先住民の権利を推進し、保護することを目的として国連が定めた「国際先住民の日」。
所有地を奪われ、自文化の存続も危ぶまれる状況にあった彼／彼女らは、
今も先住民として生きる権利を主張しつづけている。
世界各地の先住民がさまざまな催しをとおして理解を求め、相互交流をはかるこの日は、
国や民族の枠を超えたあらたな歳時になってきたといえるのではないだろうか。

南真木人（みなみ まきと）
民博 文化資源研究センター

もうひとつの八月九日

日本人にとって八月九日は、戦没者への鎮魂と反戦の誓いをあらたにする「長崎原爆の日」だが、その日はまた国連が一九九四年に定めた「国際先住民の日」でもある。世界各地の先住民はこの日、権利の承認や文化の存続と継承を求めてさまざまな事業を催す。日本では、先住民族のアイヌ民族が北海道でシンポジウムや公演会を開催しているが、愛知県においてもこの日を祝う催しが人知れず開催されてきた。それはネパール人先住民連合が、二〇〇〇年から二〇〇九年までほぼ毎年八月の盆休みに実施してきた「国際先住民の日」講演会と文化公演である。

ネパール人先住民連合（以下、先住民連合）とは、日本に超過滞在し非正規に就労してきたネパール人の先住民が一九九九年に東海地方で設立した団体である。ネパール政府が認定する先住民は五九にのぼるが、多く来日していたのはタカリー、マガール、タム、タマン、チャンティヤール、シェルパであり、彼／彼女らはそれぞれの民族協会の日本支部を立ちあげるとともに、それらを束ねる団体として先住民連合を組織した。その設立の趣旨は、先住民の連帯、先住民の文化や母語としての民族語の存続、先住民アイデンティティの涵養（かんよう）、先住民としての権利の承認要求であり、その矛先はネパール社会の支配階層であるバフン（ブラーマン）至上主義とそれを堅固に支えるヒンドゥー教のカースト制に向けられる。

離れてもなお求める

二〇〇九年八月一三日、愛知県のあるホール（二四〇席）で開催された催しには、主賓として本国のネパール先住民連合の当時会長で制憲議会議員でもあるパサン・シェルパとマガール協会元会長のゴレ・バハドゥール・カパンギという二人の民族運動家に加え、文化公演に出演する女性歌手プリティ・アレが招かれた。講演を主とする第一部は三時間におよび、三五〇〇円の入場券を買って集まったネパール人先住民は、最新のネパールの政治動向と先住民運動の進展に熱心に聞き入った。長い人であれば、既に二〇年も日本に超過滞在し、その間一度もネパールに帰国していない。それでも、彼／彼女らにとって本国の政治と先住民運動は最大の関心事なのだ。

ネパールでの催しであれば、バナーを掲げシュプレヒコールを叫びながら街頭行進をするところだが、日本ではそうはいかない。会場内をぐるりと一周行進して講演会は始まった。先住民連合や各民族協会が用意したバナーには、ネパール語で「民族自治権と自己決定権はネパール連邦民主共和国設立の根幹だ」、「統治に係るすべての部署に民族の人口比に基づく指定枠を設けるよう憲法に明記しろ」、「政教分離の実体化に向けて法制化しろ」、「国家は先住民の尊厳を認識せよ、先住民の勇敢さは国家の栄光だ」といったスローガンが書かれていた。すなわち、自治権や自己決定権、留保制度の導入などによって、先住民が国家の意思決定プロセスに参加できるよう訴えているのだ。

「国際先住民の日」講演会と文化公演（愛知県、2009年）

最大の成果

「国際先住民の日」に合わせた同様の催しは、ネパールでも大がかりに開催されている。ネパールの先住民は国連お墨つきの「国際先住民の日」を活用して、その日を自らの主張をアピールする闘争の舞台や祭典の場に仕立てあげてきた。さらに、彼／彼女らは国際的な人権規定や規約をもちだし、政府にその遵守を求めてきた。その最大の成果は、二〇〇七年、ネパール政府による国際労働機関のILO169号条約「先住民および部族民条約」（一九八九年）の批准へと導いたことだろう。ILO169号条約は、権利の限定条項がつくものの、先住民の認定基準を当事者の自己規定にすえ、先住民が伝統的に占有してきた土地の所有権と占有権を認めるなど、国内法の改正を迫る一定の効力をもつ。ネパールの民族運動家はそこに運動の活路を見出したわけだが、他方でこの背景には、批准国がいまだ二二カ国と伸び悩むこの条約をめぐり、国際労働機関がネパール政府にその批准を説きふせてきた経緯がある。また、同条約の批准国であるノルウェーとオランダ政府が、この条約を「人民戦争」（一九九六〜二〇〇六年）後の平和構築に向けた対話の道具とすることを勧め、先住民などの社会的包摂にかかわるプロジェクトやILO169号条約の履行に関して支援を始めたこととともかかわる。

継承される「あらたな歳時」

こうして見ると、「国際先住民の日」は先住民や国家のグローバルな政治のアリーナとして、あらたな歳時になってきたといえそうだ。先住民連合の役員は、「国際先住民の日」の催しにアイヌ民族の運動家を招いて話をしてもらいたいと願っていた。実現に至らなかったが、先住民のグローバルな共闘と熱意が伝わる希望であった。

ところで、ここまで先住民連合の活動を過去形で書いてきたのは他でもない。彼／彼女らの大半が摘発されてネパールに強制送還され、二〇〇九年を最後に愛知県でこのような催しが開催されなくなったからである。だが、運動の火は消えていない。今度は東京に住む正規滞在のネパール人先住民有志が同名の団体を設立し、「国際先住民の日」を祝う伝統を継承しはじめているのだ。

フィールドで考える

次に何を植えたらよいか

中井信介
日本学術振興会特別研究員PD

グローバル化の時代、都市から離れたタイの山村にもテレビを通じて世界中の情報が届く。それは、そのような山村の暮らしにも深くかかわっている。

リーダーの理解

「ゴムの木は植えてもよいがタイ北部でもすでにたくさん植えられている。タイ南部にもたくさんあるし、雲南、ラオスでは中国人がたくさん植えている。価格は今後下がるだろう。コーヒーはけっこういい。タイの人がよく飲むようになってきているから」

二〇〇九年九月、わたしが滞在し調査をしていた村の若きリーダー（当時三七歳）は、わたしに「（換金用として）次に何を植えたらよいだろうか」と問いかけた後、このように語った。そして次のように続けた。

「二〇年前にはライチの価格がよかったから、みんなが植えた。そうしたら価格が下がった。これは誰でも知っている。国がライチやコーヒーの苗を配った。コーヒーも植えた人がいるけれど、買取所がないからだめ。ショウガはチェンライやパヤオには買取所がある。買取所があればショウガも作るが、ナーンにはトウモロコシの買取所しかないから、みんなトウモロコシを作る」

タイ北部の山村の景観

このように、リーダーの話は買取価格の変化と村周辺の買取所の有無を中心に展開された。わたしにできた返答は「コーヒーはいいかもしれない。でも世界中で作っているけれど」という彼への同意程度だった。

鍵となる輸送の問題

この会話がなされたモンの山村はタイ北部のナーン県に位置する。同じくナーン県にあるナーンの町はタイ北部最大都市のチェンマイからは東へ約二〇〇キロメートルの距離にあり、車ではおよそ六時間かかる。

このモンの山村では、村人の多くがトウモロコシを年に一度作りそれを販売しておもな現金収入をえていた。平均でおよそ一二万円の年収だ。作ったトウモロコシは、車で片道一時間かけてナーンの町へ売りにゆく。その往復には一〇リットルのガソリンが必要だが、年収一二万円の人にとって、一リットル約一〇〇円のガソリン価格は決して安いものではない。

ショウガの買取所のあるパヤオやチェンライは、それぞれ車で片道四時間、六時間ほどかかる遠方なのでガソリン代はもっとかかる。ショウガを作る人が一部にとどまる理由には、この輸送の問題が関係している。

山村から世界をみる

「わたしはバンコクにも行ったことはないけれど、テレビを毎日たくさんみているので、世界のことはなんでも知っている」と豪語するおじさんが同じ村にいた。たしかに、村での調査中に知らなかったワールドカップ日本戦の結果をわたしに教えてくれた。ただ、この人は物知りだが、リーダー的存在ではない。

いっぽう、冒頭の若きリーダーだが、村の内外において抜群の信頼感があり、あらゆることがらについての理解の良さを評する声がある。村において、先の物知りおじさんは、テレビからえた世界の情報を村内に蓄えておく係とみることができよう。そして、リーダーはそのような村に蓄えられた情報も含めて吟味し、質のよい見通しをもって村人を率いる。このような集団の動向を左右する知恵者の理解は興味深い。

彼は語る。

「いまにゴムの木はタイで広く植えられるようになる。今のところタイ南部あたりに多いけれど、国の補助金をもらえているようだ。しかし、今後タイで広く植えられたときに、続けて補助金をもらえるかどうかは、わからない。国は信用していない。植えるなら一番確実なトウモロコシだ」

グローバル化という大きな社会変化のなかにあるタイのフィールドで語られた、いち山村のリーダーの見通しについて、わたしはときおり思い出して、その由来と意味するところを考えるようになった。

写真上から：
ピックアップトラックに乗り合い、町へ出かける村人たち
トウモロコシ収穫のようす。親族や知人が総出でおこなう
収穫したトウモロコシを脱穀するまで一時貯蔵する
町に売りに行く少しまえにトウモロコシを脱穀する
脱穀したトウモロコシを町の買取所で売る

8月

みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■展示観覧料が必要です。
※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」
などなど、話題や内容は千差万別！
どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

※「どっぷりオセアニア――夏のみんぱくフォーラム 2011」期間中はオセアニアに関するお話をお届けします。

7日（日曜日）
時間：15 時から 16 時
話者：ピーター・マシウス　（国立民族学博物館　准教授）
話題：太平洋の島々の衣装と布
場所：オセアニア展示場

14日（日曜日）
時間：14 時 30 分から 15 時 30 分
話者：菊澤律子（国立民族学博物館　准教授）
話題：オセアニアのことばで数をかぞえよう！
場所：オセアニア展示場

21日（日曜日）
時間：11 時から 12 時
話者：白川千尋（国立民族学博物館　准教授）
話題：フシギなチカラ
場所：オセアニア展示場

28日（日曜日）
時間：14 時 30 分から 15 時 30 分
話者：関根理恵（国立民族学博物館　機関研究員）
話題：文化をまもる
場所：本館展示場内ナビひろば

1年間みんぱくに何度でも入館できる「みんぱくフリーパス（3,000円）」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引　など。
詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00 ～ 17：00）

編集後記

前号７月号では、今年３月に新しくなったオセアニア展示にちなんだ特集号を組んだが、本８月号は、前号より「海」というテーマを引きつぎ、世界各地での海と人とのかかわりに注目することにした。管理下におけば図りしれない富の源泉となりうる反面、板子一枚下は地獄というように未知と恐怖の対象でもあった海を、人びとは手なずけ、その管理や利用をめぐっては隣人の手からも権益を守ろうとしてきた。容易に可視的な国境を引けないうえ、交流や交易面から航行を妨げるわけにもいかないところにジレンマの種がある。四方海に囲まれた日本にとって領海問題は宿命と思えなくもない。

さて本号から編集長は、久保正敏にかわり庄司が担当することになった。３年にわたり編集の取りまとめで奔走された前任者の功績を継承しつつ、『月刊みんぱく』を一方的な広報の場としてだけではなく読者と民博とのフォーラムとしても活用していきたいと思う。（庄司博史）

●表紙：木彫板　地域 パラオ島　標本番号 H0130543 他

次号の予告

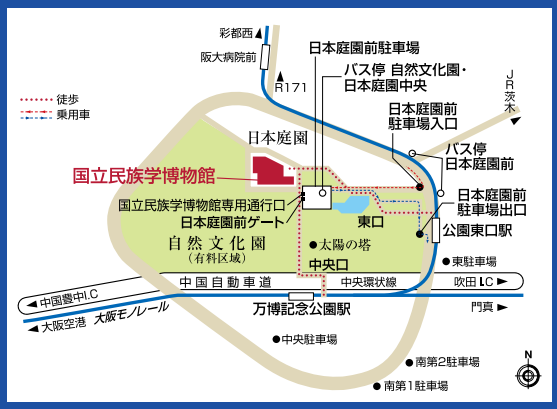
特集
特別展 千島・樺太・北海道 アイヌのくらし
ドイツコレクションを中心に

月刊みんぱく　2011 年 8 月号
第 35 巻第 8 号通巻第 407 号　2011 年 8 月 1 日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話　06-6876-2151

発行人　八杉佳穂
編集委員　庄司博史（編集長）　樫永真佐夫　川口幸也
久保正敏　菅瀬晶子　中牧弘允　山中由里子
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款
制作・協力　財団法人 千里文化財団
印刷　日本写真印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。
●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/